

其技術ニ大差アルヲ以テ編入試験ヲ行ヒ同科二年へ三人三年へ四人進級セシム 二十四日試験ノ上絵畫撰科へ一人漆工科二年へ一人入學ヲ許ス

十一月二日豫備ノ課程一人追試業ニ合格進級ス 十六日鑄金撰科一年へ獨乙一人入學ヲ許ス

本年卒業生ノ卒業後狀況ヲ舉クレハ左ノ如シ

科名	就職	一年志願兵	研究科入學	自營	計
繪畫科	二	六	一	一	二〇
彫刻科			三	一	四
彫金科		一	二	一	四
鑄金科				一	一
詩繪科				六	六
計	二	七	六	二〇	三五

前ニ記載シタルモノ、外本年間ニ於ケル入退學其他生徒ニ関スル事項ヲ舉クレハ左ノ如シ

研究科へ入學シタルモノ 七人
 修了シタルモノ 一人
 再入學ヲ許シタルモノ 一人
 病氣事故等ノ為メ退學シタルモノ 七人
 除名シタルモノ 三人
 卒業生ニテ除名シタルモノ 一人
 退學ヲ命ジタルモノ 一人
 停學ヲ命ジタルモノ 三人
 懲戒シタルモノ 三人

學科新設ノ為メ轉科ヲ許シタルモノ 十九人

(道庁府県別各科生徒現員表および歳出・歳入、所有物件に関する事項は省略)

解説

1 規則改正

改正の要点は次のとおりである。

一、九月開設の西洋画科、図案科の学科課程の制定も含めて、全体の学科課程を左記のように改正した。予備の課程を甲種(平面的造型の領域)と乙種(立体的造型の領域)に分けたのを始めとして全般的に専門教育の充実を図っている。また、外国語(英語、仏語)の科目がこのとき初めて置かれた。

豫備之課程

甲種(繪畫科、圖按科、漆工科志望者ニ課ス)

繪畫	每週二十八時
歷史	全四時
美術史	全二時
外國語	全二時
書學	全一時
體操	全二時

乙種(彫刻科、彫金科、鍛金科、鑄金科志望者ニ課ス)

彫塑	每週十八時
繪畫	全十時
歷史	全四時
美術史	全二時

外國語

書學

體操

繪畫科（日本畫科、西洋畫科ノ内一科ヲ撰ビ專修セシム）

第一年

實習

歷史及考古學

美學及美術史

美術解剖（西洋畫科ニ限り實習時間内ニ於テ之ヲ課ス）

遠近法（全上）

體操

第二年

實習

歷史及考古學

美術解剖（西洋畫科ニ限り實習時間内ニ於テ之ヲ課ス）

遠近法（全上）

體操

第三年

實習

歷史及考古學

美術解剖（日本畫科ニ限り實習時間内ニ於テ之ヲ課ス）

遠近法（全上）

第四年

實習及卒業製作

用器畫法（教員志望者ニ限り實習時間内ニ於テ之ヲ課ス）

教育學（全上）

圖按科

第一年

實習

繪畫

歷史及考古學

美學及美術史

圖按法

建築裝飾史

體操

第二年

實習

繪畫

歷史及考古學

建築裝飾術

物品製作大意

用器畫法

體操

第三年

實習

繪畫

歷史及考古學

第四年

實習及卒業製作

用器畫法（教員志望者ニ限り實習時間内ニ於テ之ヲ課ス）

全二時

每週十六時

全十二時

全二時

全二時

全二時

全三時

全三時

全二時

每週十四時

全十二時

全二時

全三時

全三時

全三時

全二時

每週二十六時

全十二時

全一時

全一時

每週三十九時

全六時

全六時

教育學 (全上)

全 二 時

彫刻科 (木彫科、石彫科、牙角彫刻科)
ノ内一科ヲ撰ビ專修セシム

第一年

實習

每週二十三時

繪畫及圖按

全 九 時

歷史及考古學

全 二 時

美學及美術史

全 二 時

美術解剖

全 一 時

體操

全 二 時

第二年

實習

每週三十四時

歷史及考古學

全 二 時

美術解剖

全 一 時

體操

全 二 時

第三年

實習

每週三十八時

歷史及考古學

全 一 時

第四年

實習及卒業製作

每週三十九時

美術工藝科

彫金科

第一年

實習

每週二十時

繪畫及圖按

全 九 時

歷史及考古學

全 二 時

美學及美術史

全 二 時

圖按法

全 二 時

美術解剖

全 一 時

金工史

全 一 時

體操

全 二 時

實習

每週二十四時

繪畫及圖按

全 九 時

歷史及考古學

全 二 時

應用化學

全 二 時

體操

全 二 時

實習

每週二十八時

繪畫及圖按

全 九 時

歷史及考古學

全 一 時

應用化學

全 一 時

實習及卒業製作

每週三十九時

鍛金科

每週二十時

繪畫及圖按

全 九 時

歷史及考古學

全 二 時

美學及美術史

全 二 時

圖按法

全 二 時

美術解剖	全	一	時
金工史	全	一	時
體操	全	二	時
實習	每週	二	十四時
繪畫及圖按	全	九	時
歷史及考古學	全	二	時
應用化學	全	二	時
體操	全	二	時
實習	每週	二	十八時
繪畫及圖按	全	九	時
歷史及考古學	全	一	時
應用化學	全	一	時
實習及卒業製作	每週	三	十九時
鑄金科	第一年		
實習	每週	二	十時
繪畫及圖按	全	九	時
歷史及考古學	全	二	時
美學及美術史	全	二	時
圖按法	全	二	時
美術解剖	全	一	時
金工史	全	一	時

體操	全	二	時
實習	每週	二	十四時
繪畫及圖按	全	九	時
歷史及考古學	全	二	時
應用化學	全	二	時
體操	全	二	時
實習	每週	二	十八時
繪畫及圖按	全	九	時
歷史及考古學	全	一	時
應用化學	全	一	時
實習及卒業製作	每週	三	十九時
鑄金科	第一年		
實習	每週	二	十時
繪畫及圖按	全	九	時
歷史及考古學	全	二	時
美學及美術史	全	二	時
圖按法	全	二	時
漆工史	全	一	時
體操	全	二	時
實習	每週	二	十四時

體操	全	二	時
實習	每週	二	十四時
繪畫及圖按	全	九	時
歷史及考古學	全	二	時
應用化學	全	二	時
體操	全	二	時
實習	每週	二	十八時
繪畫及圖按	全	九	時
歷史及考古學	全	一	時
應用化學	全	一	時
實習及卒業製作	每週	三	十九時
漆工科〔旧称時絵科。二十九年九月改称。〕	第一年		
實習	每週	二	十一時
繪畫及圖按	全	九	時
歷史及考古學	全	二	時
美學及美術史	全	二	時
圖按法	全	二	時
漆工史	全	一	時
體操	全	二	時
實習	每週	二	十四時

繪畫及圖按

歷史及考古學

應用化學

體操

第三年

實習

繪畫及圖按

歷史及考古學

應用化學

第四年

實習及卒業製作

〔東京美術學校一覽從明治廿九年
至明治三十年より転載。〕
每週三十九時

各科目の担当者は次のとおりである。

全 九 時

全 二 時

全 二 時

全 二 時

每週二十八時

全 九 時

全 一 時

全 一 時

囑託教員

助教授

全

全

○圖按科

教 授

助教授

全

○彫刻科

教 授

全

全

助教授

囑託教員

○美術工藝科

教 授

助教授

全

○鍛金科

教 授

囑託教員

全

○鑄金科

黑田清輝

藤島武二

和田英作

岡田三郎助

福地復一

横山秀麿

本多佑輔

高村光雲

竹内久一

石川光明

山田鬼齋

新納忠之介

長沼守敬

加納夏雄

向井繁太郎

岡部覺彌

海野勝珉

平田惣之助

櫻井正次

○豫備之課程

助教授 繪畫

全 彫塑

○繪畫科

○日本畫科

教 授

全

考古學

○西洋畫科

帝室技藝員

帝室技藝員

關保之助

西郷規

大村西崖

橋本雅邦

川端玉章

下村晴三郎

帝室技藝員

兼彫金

海野勝珉

帝室技藝員

加納夏雄

向井繁太郎

岡部覺彌

海野勝珉

平田惣之助

櫻井正次

教授	岡崎雪聲
助教授	杉浦瀧次郎
全	沼田勇次郎
囑託教員	帝室技藝員 川之邊一朝
全	金井清吉
助教授	六角注多良
囑託教員	橋本市藏
全	秋月復郎
教授	岡倉覺三
全	黒川眞頼
囑託教員	陸軍軍醫學校長 森 林太郎
全	第一高等學校教授 小島憲之
教授	磯野徳三郎
全	久保田鼎
囑託教員	帝國博物館主事 塚本 靖
全	本田幸之助
全	小杉 榎 邨
全	前田健次郎
全	考古學 久米桂一郎
全	美術解剖 中澤澄男
全	外國語 合田 清
全	後藤貞行
助教授	教場掛兼庶務掛兼務 劔持忠四郎
	(同前)

二、入学在学及び退学規程が改正された。

入学生の年令の上限、下限が一年引き上げられ、満十七歳以上満二十歳以下となった。入学試験科目は読書、作文、数学、地理、歴史、理科、外国語(英、独、仏の一つを撰ぶ)、専門実技となり、初めて外国語が加えられた。また、歴史の科目は従来、日本及び支那歴史大要であったが、日本及び外国歴史大要と改められた。

三、研究科の在学年限が二年から三年に延長された。

2 図案科設置

図案科設置の準備は「美術学校拡張法案」の可決とともに始まり、十八年九月には図案教室が特設され、ここで絵画科各教室の志望者を対象とする図案授業(毎週三日)が行われたりした。かくて、翌二十九年七月、工芸図案家と建築裝飾図案家の養成を目的とする図案科が設置され、同年九月の新学期より前記のカリキュラムに基づいて授業が開始された。

同科の主任教授は福地復一で、彼は工芸図案の方面を担当し、建築裝飾図案の方面を囑託の塚本靖が担当した。

福地復一(号天香)は伊勢の生まれで津師範学校を出て諸学校に勤務したのち上京。三田英学校に学び、教育書の編集に携わった。明治二十二年以降は伊勢神苑会より歴史博物館設計取調を囑託され、一方、帝國博物館雇ともなり、同二十五年以降は臨時全国宝物取調局の掛員となっている。このようなことから岡倉校長と近しくなり、信任を得て、同二十七年七月に本校の「東洋美術史」授業囑託となり、同年十一月には早くも教授に昇格して、今泉雄作(同年十月京都市美術工芸学校長となる)が担当していた「図案」、「図案法」、「新案」の科目も兼担することとなった。かくて、図案科開設とともに同科の主任となったが、しかし、校長やほかの教員と

対立して同三十年四月には辞任してしまつた。

塚本靖は東京帝国大学造家学科卒業。明治二十六年以降本校の建築裝飾授業の囑託教師であつたが、同二十九年一月に解囑となり、関野貞がこれに代わつた。同年十二月、関野が辞任し、再び塚本が起用され、図案科の「建築裝飾史」、「建築裝飾術」、「用器画法」等を担当。同三十二年七月、欧米留学のため辞任するまで在職している。この塚本に加えて明治三十年三月には同じく東京帝国大学卒業の大沢三之助が図案科の「建築製図」授業囑託として採用され、以後、塚本が講義を、大沢が実習を担当するといふ状態が暫く続いた。

ところで、塚本を再起用する際に岡倉校長は次のような手紙を出している。

肅啓 過日ハ失礼御免被下度願候 陳レハ美術学校授業の儀 早速御承諾被下有難存候 御質問の二項左の通ニ候

一 建築裝飾史ハ従來の通一般(図按共)ニ課スルモノニ有之 而し
図按科の爲めニハ別ニ用器画及建築裝飾実習ヲ設ケ居是又御担任願度 尤モ図按科ハ之ニ二分し其内建築裝飾科ハ獨立の一科トスル見込ニ候

一 資格は囑託ニテ差支なく候 他ニ御見込候ハ、被申越候
右拝答迄

十一月十六日

塚本兄

〔岡倉天心全集〕第六卷。昭和五十五年。平凡社〕

ここに記されているように、当時の岡倉校長は「建築裝飾科」を独立させる考へであつた。このことは翌三十年八月起草の「美術教育施設ニ付意

見」に建築科設置を第一の要求事項として掲げていることから明らかである。独立の前段階として三十年九月には図案科を二教室に分け、第一教室では主として諸器物及び平面模様並びに室内裝飾の図案を教え、第二教室では主として建築裝飾及び室内裝飾の図案を教えることとした(『錦巷雜綴』第九卷)。以来、建築裝飾家養成の専門教育が発足したのであるが、しかし、独立の計画はその後に起こつた美術学校騒動や諸般の事情により延び延びとなり、大正十二年に至つて漸く実現している。

次に、生徒についていうと、図案科設置とともに絵画科生徒の中の多くが転科を希望し、川上為之助(絵画科一年級より)、井上清(同二年級より)が図案科三年級に、河辺正夫、竹本曜二、伊藤啓次郎、久保田誠次郎、江島五三郎、千頭庸哉、吉田衡、小檜山右近、松長長三郎、大槻才吉、中西乾(以上一年級より)が二年級に編入され、村上通太(予備の課程より)、岡田村雄(同上)が一年級に進んだ。二年級の生徒数が格別に多いが、これは例外的であつて、このあとはいよいよ一年一〜二名足らずの状態が続き、明治三十年代半ば以降に七〜八名程度となる。当時はまだ図案家を支える社会的基盤が弱かつたのである。

図案科はフェノロサが特に設置の必要性を主張していた科であり、本校設置の時点で一度設置はされたのであるが、授業開始前に廃止となり、美術工芸科がこれにとつて代わつた。学校当局すなわち岡倉校長は図案科の必要性は認めながらも、刻々亡びゆく名工者宿の妙技を後世に伝えなければならぬという当面の急務に対処するためにはこうした措置をとらざるを得なかつたのである。以来、図案家養成は絵画科の教育の一環としてのみ行われて来たが、その間、岡倉校長は「鳳凰殿」室内裝飾製作におけるように、図案の開発に積極的姿勢を示し、その結果、卒業製作に室内裝飾図案が登場するなど、図案家誕生の気運も生じたのであつた。こうした経

緯が図案科設置の促進力となったと考えられる。一方、明治二十九年当時の図案界の状況をみると、懸賞図案募集や図案研究が非常に盛んになってきており、これも本校図案科設置の促進力となったように思われる。明治二十年代になると、十年代における内務省勸業寮図案科や起立工商会社の輸出品図案製作が下火になったのに代わって民間の動きが活発になり、京都高島屋飯田呉服店や西陣の機織家による懸賞図案募集が始まり、東京では岸九岳らの東京応用画会や本校校友会が図案の注文製作を始める。両京の美術協会もこの動きに倣って図案の募集や展示を盛んに行う。その間に図案研究団体も次々と生まれるが、なかでも明治二十七年三月発足の同尚好尚会は本校との関係において注目すべき団体である。メンバーは今泉雄作、川端玉章、川崎千虎、竹内久一、福地復一等々で、毎月一回、課題の装飾図案を持ち寄って合評会を開き、等級をつけた。『錦巷雑綴』によって、初会の服紗合わせに始まって浴衣合わせ、置物合わせ、扇合わせ、屏風合わせ、巻紙・封筒合わせなどが行われたことがわかる。受賞者の中に有元徹三郎、梶田半古、村田丹陵らの名があるところを見ると、本校生徒や日本青年絵画協会員がかなり出品していたらしい。なお、これと同じ年に藤岡注多良（六角紫水）ほか数名による工芸図案会が結成され、翌二十八年には岡倉校長、橋本雅邦の意匠研究会が絵画と併せて図案の懸賞募集を始め、また、美術育英会が発足して同じく図案の懸賞募集を行っている。

3 西洋画科設置

明治二十九年に入り図案科が独立すると同時に、これまで日本画のみであった絵画科に新たに西洋画が加えられる。同年七月八日に改定された学校規則によって、学科課程における予備の課程が甲種（絵画科、図案科、

漆工科志望者）、乙種（彫刻科、彫金科、鍛金科、鍍金科志望者）の二種に分けられ、七月二十一日には次のような告示がなされた。

明治廿九年七月廿一日告示十一號

東京美術學校學科中ニ圖案科ヲ新設シ繪畫科中ニ西洋畫科ヲ加ヘ本年九月ヨリ授業ヲ開始ス

（『本校関係法令書類 從明治二十年』）

これに先立つ同年四月十七日、久米桂一郎が西洋画科に関する美術解剖および考古学の授業を、五月十五日には黒田清輝が西洋画科の授業を囑託されている。

黒田と久米はフランス留学時代、共にパリのアカデミー・コラロッシン Academie Colarossi 内のラファエル・コラン Raphael Collin（一八五〇—一九一六）の教室で西洋画を学び、明治二十六年（一八九三年）に帰国、明治美術会展覧会や内国勸業博覧会等に滞欧作品を発表、外光描写を取り入れた明るい画風で我が国の洋画界にひとつの転換を齎しつつあった。この新婦朝の二人が新設の東京美術学校西洋画科の指導的地位に就いたことは当然世間の耳目をひく。

毎日新聞記者吉岡芳陵は明治二十九年の美術界を回顧して次のように書いた。「國粹美術一點張りなりし東京美術學校が、此年に至りて新派の黒田清輝、久米桂一郎氏を聘して洋畫を容れたるは、斯界の爲めに一變転の機として稱するを得べく、特り此年に於けるのみならず、本邦美術史上の大事記なるを知る」（吉岡芳陵「美術界の一と年（中）廿九年の現象」『毎日新聞』明治三十年一月十二日）。

黒田と久米は西洋画科の授業を囑託された直ぐあと、それまで所屬して

いた明治美術会を脱会して洋風美術家の新しい団体白馬会を結成している。これには山本芳翠、合田清、小代為重、藤島武二、岡田三郎助、和田英作、小林萬吾、安藤伸太郎、中村勝治郎、長原孝太郎、菊地鑄太郎、小倉惣次郎、佐野昭、岩村透らが参加、新聞は彼らを指して新派と呼んだ。対して明治美術会に拠った人々は旧派とされた。また画風の印象から新派は紫派、旧派は脂派といわれる。

芳陵が言うように、一貫して伝統技法に立脚した絵画教育によって国風美術の創造的復興をめざしてきた東京美術学校に西洋画科が新設されたことは本邦美術史上の大事件であった。

東京美術学校創設の時、工部美術学校（明十六年廃校）以来のこの国立の美術教育施設に洋風美術科を設置させようとする西洋画家たちの運動があったことはよく知られている。

たとえば、自ら洋画塾を経営し西洋画の研究と普及に腐心していた高橋由一も国立美術学校設立の報に接し、この新しい学校には、「日本固有画術」と併せ「泰西画術」の学科を設けて欲しい旨の働きかけを各方面になしていたひとりである。明治十九年ごろの高橋が執筆したと思われる総理大臣「伊藤博文」宛願書の草稿（青木茂編『高橋由一油画史料』九—一〇頁）が残されているが、それには次のような行がある。

〔略〕 聞く処によれば 官日本固有画の奨励を教育上に及ぼさるゝ也と 真偽は未だ知り得され共、万一風説の如くならんには洋画法をも併せて奨励せられん事を希望す然るときは受業生の実益便利若干あるへし 右事情は素より其要路に向きて建言すへきは至当なる事なれ共 和洋両画の奨励法を希望するは又教育学科のみに限るへからず 広く将来の工芸技術に關係する事柄なるか故 傍觀するに忍びず愚見を吐露する所以

也 閣下曾て工部卿にあるの日工部省中に美術校を設置し海外の画博士をして洋画法を教授せしめられたる事あるを以て実に感佩する所なり 生等海外の絵画に積年従事して閣下の美筆を贊嘆感銘するを以て 仰き冀くは此際更に和洋併立奨励の法方を盛大に設置あらん事を

右のような運動にもかかわらず、結局のところ東京美術学校へ洋風美術の一科を設置することに失敗した西洋画家たちは、明治二十二年に明治美術会を結成、展覧会を組織して洋風美術の普及を計り、独自の教場（後に明治美術学校）を設け後進の養成に努めることになるが、一方で外部から東京美術学校の改革を叫びつづけていた。

明治二十四年三月二十九日地学協会で開かれた明治美術会月次小会で東京音楽学校校長であり明治美術会の諮詢員でもある伊沢修二は東京美術学校問題に触れ、「固と政府の學校を設けたのは何の爲かと云へば、國の文明を進める爲で、國の文明を進むるのは千年も先きのことを計畫するのではありません、今日の文華を進むる目的であります、夫れであるから今日何事でも總て新入の原素を持つて居るのである、美術獨り新入の原素は一切入れない……構はないと云ふ様な政府の仕方は、我々教育社會のものから見ても甚だ疑ふ所であります（喝采）諸君は之を以て如何思はれるか、若し御同意ならば建議しては如何でありますか、此明治美術會は大家著名の諸氏の集合でありますから、是等のことを建議するならば、此會を措きて他になからうと思はれます、此會から東京美術學校の中に西洋畫を入れて貰いたいと云ふことを、建議になつて能からうと思ひます。」（『明治美術會第十二回報告』）と述べ、委員を選び巨細を調査すべきだと提言している。

伊沢発議の「泰西繪画ノ一科ヲ其筋ニ設クルノ建白ニ關スル調査」は早

速始められるが、伊沢自身が前記演説の中で自らの発言とは裏腹に「私は文部省の一部分に加はつて居りますが、文部省ではそんな考えは無いかと思ひます。故に此建議を爲しても十中八九までは出来兼ねる方かと思はれます。」と付言しているように、当時、文部省がこれを許諾する空気はまったくなかった。

しかし、明治二十五年ごろから情況は少しずつ変わっていく。この年、翌二十六年五月シカゴで開催予定のコロンブスのアメリカ発見四百年記念世界博覧会への出品をめぐる博物館、とりわけ九鬼隆一と明治美術会を中心とする西洋画家たちの間で論争が起り、これが毎日のように新聞紙上を賑わし世間一般の西洋画に対する関心をよび起こす。しかも、二十六年七月の黒田清輝と久米桂一郎の帰国が、漸く盛り上がりつつあった洋画界の活性化に一層の拍車をかけることになった。

明治二十七年六月、岡倉覚三は美術教育全般にわたる構想を認めた文書「美術教育施設ニ付意見」を政府関係者など関係各方面に配布する。岡倉の狙いは美術学校の拡張を企図したものであるが、ここで岡倉は、絵画科に従来からの四教室、すなわち古代および巨勢・土佐派の絵画を教授する第一教室、足利・徳川前期の雪舟・狩野派の第二教室、徳川後期の円山四條の第三教室、図案の第四教室に加え、支那画派の教室と泰西画派（西洋画）の教室の新設を明らかにした。もちろん岡倉は泰西画（西洋画）を他の諸流派と同列の一流派としてしか捉えていないのであるが、ともあれ、これは世間の西洋画に対する同情の高まりを敏感に察知した岡倉なりの対応と見ることもできる。

右の岡倉の「意見」に基づいたと思われる「美術学校拡張ニ関する建議案」なるものが同年末の第八議會に自由党の末広重恭から提出され、翌二十八年三月十一日に可決を見た。しかしこれには特別委員長広瀬貞文の

「今マデハ東京美術學校ニモ泰西ノ美術ト云フモノハ入レテアリマセヌデシタガ、是モ矢張美術學校トスル以上ハ、獨リ我邦ノ美術ノミナラズ、西洋ノ油繪水彩繪其他ノ美術モ入レタラ宜カラウト云フノデ、東京美術學校ヲ擴張シマス同時ニ、此泰西畫或ハ泰西彫刻モ入レルト云フコトニシテ（後略）」（衆議院議事速記録第四十五号）という意見が付されていた。岡倉はこうした外部の情勢への対応策を模索しつつ自らの構想実現を計るべく苦心していたに違いない。

明治二十八年末、岡倉自身が直接西洋画科設置に言及した談話が雑誌『早稲田文学』（明治二十九年一月号）の彙報欄に掲載される。

若し日本古来の美術を王朝時代（藤原時代）、鎌倉時代（精しくは鎌倉時代より足利時代に至るの間）、徳川時代（二百年以來平民的思想の發達せし時代）の三大期に區割せば、明治の今日はこの三期間の悉く復興せられ、混在せるの時代なり。今日はこれら美術の三元素の混沌として定形を得ざるの時なり。今日この三分子の基礎を定めずば、恐らく西洋美術に蹴ちらさるゝ事あるべし。この故にわが美術學校にては此等過去美術の凡てを總合し、今日の知識をもて如何にこれを利用すべきかといふ問題を學生に與ふるを目的とす。さればわが美術學校は、或論者の難する如く、決して西洋畫を排斥するものにあらず。寧ろ先づ日本美術の歴史的根據を牢くし、さて後西洋美術の精華をも參酌せしめんと欲するなり。故に本校は來年度より新たに西洋畫の一科を加へ、且西洋へ留學生をも出ださん心組なり。〔後略〕

この談話は二十八年中に西洋画科の新設が既定のものになっていたことを物語っている。そして岡倉は西洋画の導入があくまでも自分の構想に則

ったものであることを印象づけようとしている。にもかかわらず明治二十九年七月の規則改正によって現実化したものは「絵画科中ニ日本画ト西洋画トノ二科ヲ設ケマタ図按科ヲ新設ス」という岡倉の思惑をはるかに超えるものとなった。

一方、西洋画科の新設には当時文部大臣の地位にあった西園寺公望（明治二十七年十月三日から同二十九年九月二十八日まで在任）の介在がしばしば指摘される。たとえば、長く美術学校校長の座にあった正木直彦（明治三十四年から昭和七年まで在任）は「明治二十九年に、西園寺さんが文部大臣の時、西園寺さんは黒田、久米等と佛蘭西に於ては交遊の間柄であったし、洋畫に就いての理解もあつたので、洋畫排斥の本城である東京美術學校に洋畫科を設けることにしたのであつた。」（正木直彦『回顧七十年』三〇二頁。学校美術協会出版部。昭和十年）と回想している。正木は明治三十年六月から三十二年十一月まで文部大臣秘書官を務めているので当時の事情を承知していたとしても不自然ではない。

また、白馬会研究所で黒田の指導を受けた高木誠一（誠一郎。号背水）は「明治二十六年、黒田清輝氏は久米桂一郎氏と共にフランスより歸朝したが、一時的にへん不遇であつた。それがために黒田氏は再度フランス行を企てたのであつたが、西園寺公がそれを止めた。西園寺公には腹案があつた。美術學校に洋畫を起さうといふのである。やがて西園寺公が文部大臣になり、美術學校に洋畫科が設けられるや、黒田、久米の兩氏は招かれ美術學校の囑託教授になつた。」（直木友次郎編『高木背水伝』二八頁。大肥前社。昭和十二年）と述べている。

高木（明治二十年—昭和十八年）は佐賀県出身で、明治二十七年同郷の岡田三郎助の手引きで堀江正章の指導する画塾大幸館に入門する。同二十

九年大幸館解散後は白馬会研究所に移り、同三十一年東京美術學校西洋画科撰科に入学するが、三カ月ほどで辞めている。

西洋画科開設の準備段階から黒田と行動を共にしていた久米桂一郎も「黒田清輝伝」（『黒田清輝作品収蔵目録』所収。美術研究所。昭和四年）で、「東京美術學校に西洋画科を設けて、黒田を其主任に採用すること」は、当時の文部大臣西園寺公から博覽会の会期中に京都で話があつて内定し、二十九年の初から画室の建築を設計して、五月に任命を発表され」と証言している。また、久米は『国民美術』大正十三年九月号の「黒田子爵追懷座談会」でも「西園寺さんが文部大臣の時に黒田を美術學校に入れた。西洋画を入れたのは西園寺さんだ。二十九年の四月だ」と語っている。

ここで言う博覽会とは明治二十八年四月一日から七月三十一日まで京都岡崎公園で開催された第四回内国勸業博覽会を示す。黒田はこの時審査官であつたが、出品した滞欧作の「朝妝」が裸体画であることから風紀上の問題として警察の干渉を受け、いわゆる裸体画論争を惹き起こし新聞紙上を賑わした。その際、かつて洋風美術排斥の急先鋒であつた九鬼隆一審査総長が黒田の作品展示を擁護したことが注目された。

前出の久米の証言が確かであれば、二十八年の前半に黒田は西園寺と西洋画科設置の件ですでに話していたことになる。岡倉が黒田と具体的打合せに入つたと思われるのは一年前のことである。

黒田は博覽会終了後、翌二十九年の四月まで京都に留まり住友家から依頼された「昔語り」の製作に取り組むが、藤島武二によれば、黒田を住友に紹介したのは西園寺であり、二十八年十一月京都に出来たアトリエも住友の後援によるものだといふ（藤島武二「故久米桂一郎氏追悼」『美術』九一九、昭和九年九月）。ちなみに実業家住友吉左衛門は徳大寺公純の六男

で西園寺の実弟にあたる。

ともかく、この京都滞在中の二十九年三月十一日、黒田はおそらく西洋画科に関する件で岡倉校長からの手紙を受け取った。以下、『黒田清輝日記』(全四巻、中央公論美術出版、昭和四十一—三三年)によって岡倉との交渉の様子を見てみる。

二十九年二月二十三日「西園寺侯への手紙」を書く。三月十一日「Ce soir j'ai reçu une lettre de M. Okakura, le directeur de l'Ecole des Beaux-Arts à Tokio. (夕方、東京美術学校長の岡倉氏から手紙が来た——引用者訳。以下同)」十二日「J'ai répondu aujourd'hui M. Okakura (今日、岡倉氏へ返事を書いた)」。十七日「今日ハ岡倉氏、久米公等から手紙が来た」

十七日に届いた岡倉からの手紙は次のようなものである。

拜啓 御書中之趣敬承仕候 陳ハ兼而得貴意候通当校課程中西洋画科増設之儀決定條上ハ来四月一日より教室之設計及授業上等に關し夫々準備致度候ニ付其以前に於て得御面晤度存候間御都合も可有之候得共御縁合御帰京相叶候ハ、大幸に御座候

敬具

三月十六日

岡倉 覚 三

黒田清輝殿 侍曹

(『岡倉天心全集』第六卷、八六頁。平凡社。昭和五十五年)

岡倉からの要請に応えるべく東京に帰った黒田は、二十一日「車で上野へ行き岡倉氏ニ面會し Nous avons causé ensemble des affaires de la section de la peinture européenne à organiser etc. (西洋画科の編制などについて話し合った)」。二十二日「西園寺を訪ねたのち、山本芳翠老

の家へ行き「学校のアトリエ建築の図按をやってもらひ」「学校の規則の考按を二時までしてねたが一向ねられず四時を聞た」。二十三日、岡倉の私宅まで行き「建築の事や規則の事を話し」、二十四日には「オレと久米ノ履歴書を郵便で岡倉氏へあてゝ出し」、二十五日「西園寺侯の處ニ逢ヒニ行きかきかけの畫の話やら未來の事學校の事などを話した。」

このように岡倉は西洋画科の件ではすべて黒田に一任しており、また黒田は学校のことを逐一西園寺に報告していたようである。

三月二十九日いったん京都へ戻り、四月二十二日再び東京に帰ってから黒田はいっそう精力的に動き回る。長原孝太郎の件で岡倉に談判したり(五月二日)、久米と「学校の爲ニ巴里へ注文するもの等ニ付相談した」り(同四日)、岡倉といっしょに「大學校ニ行てモデル用プラアートルを一覽」(同六日)、また久米と「美術學校の爲ニ注文する繪具などの一ツ書をこしらへて手紙を出す計ニした」(同八日)といった工合である。

黒田は長原を助教授として入れようと岡倉に計ったが、実現しなかった。長原の言によれば「岡倉君が私と合はないので、といふよりも私を好かなかつた為めにとうとう私は就任しなかつた。といふのは、それより前に、私が岡倉君と共に全国の社寺巡りに廻った時、一寸したことで同君に桶突いたことなんかあったからだらう」という(長原孝太郎「原田のことなど」『アトリエ』三一—九。大正十五年九月)。長原は岐阜県大垣の出身。初め小山正太郎に就き洋画を学び、明治二十二年以来理科大学の生物学教室で標本画の仕事に従事していたが、二十八年頃から黒田清輝に師事、岡倉辞任後の同三十一年十月に西洋画科の助教授に就任する。

黒田はそのほか、三重県尋常中学校で助教諭をしていた藤島武二を呼び寄せるなど、西洋画科のスタッフのことや教材の手配、入学試験の件など

岡倉らと交渉をすすめ、九月一日から試験を実施、いよいよ十四日、西洋画科の授業を開始できるまでに漕ぎつける。授業は初め仮教場で行われたが、十一月に新築の教場が完成する。(以上『黒田清輝日記』による。)

ところで黒田は、西洋画科をどのように運営しようとしたのだろうか。授業が開始される前、記者の求めに応じ語った黒田の抱負が「美術学校と西洋画」と題して『京都美術協会雑誌』第四十九号(明治二十九年六月刊)に掲載された。黒田の考えを知る上で重要な記事なので以下に全文を引用する。

◎美術学校が洋畫科を置いて余が之を擔任することになりしに就ては、余は出來得る限り自由即ち規則などに束縛せられない様な工合にして學生の習學に便する考へ：渾べて自分が此學校に入らうと思つたり、生徒に爲つて勉強して居ると假定めた時は何ふであらうと、自分を其境遇に置いて考へを立て、往く積りです、いくら入學試験なればとて數學などは餘り厳しく爲たくない、畫を習はうといふのに數學で入學が出來ぬのも愚な譯、畫を習はせやうといふ精神にも違ふ譯、彼學校に入らうには中學校以上の學力を有つて居る證明を要するといふので普通の教育があることは極つて居ればそれで澤山である……而して入學者の力に依りて二年にも入れ三年にも取る積りです

◎この洋畫科は都合四年の學期で第一年は石膏物の寫生第二年は人物即ち裸躰等の寫生此二年は木炭で第三年に至り油繪を習はせ第四年を以て卒業試験に充てる次第で……勿論繪の具の使ひ方など油繪に掛る仕度とでも云ふべきことは一年二年の間に於て適宜に習はせる、ソコデ

◎美術解剖—日本の油繪家で眞の人間の死骸を前に置いて、解剖を研究したものは恐らくは無かるう……造り物の死骸ではあるかも知らぬが：

：斯る材料は官設の學校になると非常に便利が多い、此度美術學校では久米君が擔當して美術解剖、即ち筋と骨に就きて二年三年の洋畫科學生に授けるのです

◎一年二年の間と雖も、風景等の畫は其地に臨み寫生で學はせる積りです……總べて繪手本を給がうといふことはしない、唯だ美術學校には古畫の印刷畫などがありますから之を給がう筆の使ひ方を研究させる積りです

◎繪畫に於ける腦裏の教育即ち人物の置き方、光線の取方、色の配合など其想像力を養ひつゝ繪を教へて往くには勢ひ課題が必要、殊に歴史畫なる時は其想像力を及ぶ限り廣げることにより便利が多い、ソコで三年生となれば、毎週に一回位宛歴史畫の課題を與へて腦裏の教育をする積りです

◎歴史畫を課題とすればとて、何も歴史畫を重んじての譯ではない、假令ば知識とか、愛とか云ふ様な無形的の畫題を捉へて、充分の想像を筆端に走らす如きは無論高尚なことなれど、二三年やつた位の處では出來そうにもない、其れよりは先づ相當な歴史畫を將つて、其課題とするのが至極稽古中に適すると思ひます

◎第四年の卒業試験……是れは第四年となれば全年を卒業製作の爲めに與へる、即ち前半年は其構案に後の半年は其製作にといふ様に……

◎學校はほんの畫を描く土臺を造る處、言はゞ畫かきの下拵マタへすので、此學校を卒業したからと云つて一人前の畫家に爲つたと思はれては困る……三四年の修業で直ぐ畫伯といふ連中があらはれては大變……ところで美術學校では卒業試験に及第せしものゝ中、學校の先生に爲る人は格別、左様でなき人々は試験成績の優等の處十二三人を撰んで、之にモテル其外充分の材料を與へて、前の卒業製作をほんとうの者に仕上げさせ

せ、其仕上げたものを閱して、最優等二人程を撰び佛國に留學させる筈です、此等は總べて經費と相談の上にも依れど、毎年二人宛として少くも三年間は彼地に留學させる心算です、而して留學生は滞在中時々博物館等の作を臨摹して美術學校に……丁度巴里から羅馬に畫家を出だして古畫などを寫し來させる様に……絶へず其摹本を送つて來ることにしたら、参考品も良いのが殖へて斯道の發達を助けるだらうと思ひます

◎始終實地の便益を謀り、自由に學問が出来る様にして往きたい精神ですから、第三年に來て油繪を學びながらも、人物の寫生を少し研究する必要があるが生じたら、隨意二年の科に至りて之を習ふことが出来、二年生亦た時には一年生の中にはいりて、石膏物の寫生をすることもあるだらう、時間になつたからと云つて仕事を離れられぬ場合があつたら、時間後だ處がやつて居る様にした……先づ余の考は斯んな事です

◎いよ／＼九月から洋畫科が始まるとなつたら、豫科の中よりも來やうし、本科の今迄日本畫をやつて居た人で之に來るものもあるとか云ふことですから中々面白くなつて來ませう

◎油繪の具は今の處佛國より取寄せるのですが……此頃大學より化學士一人を聘しました、是は油繪の具等の製し方を研究し、追々日本の油繪の具を製する様にした考へなので……ソレで日本人の頭腦から調査した繪の具が出来、日本の畫家が之を使ふこととなつたら、其れこそ日本化する洋畫が始めて其時に見られるでせう。

このような教育方針は、黒田らのフランス留學時代の習字法を土台に考へたものであり、多少の変更はあるにせよ、この構想が以後の西洋画科での教育の根幹を成していく。

また、二十九年七月に改定された學校規則で新たに定められた絵画科の

学科課程は黒田の意見を取り入れた結果であるとしてよい。因みに改定前の二十八年度の絵画科の学科課程は次のようなものであった(『東京美術学校一覽 自明治二十八年 明治二十八年十二月発行による。』)

繪畫科

第一年

臨 摸

(名畫ニ就テ臨撫摸寫ヲ爲サシメ筆墨彩繪ヲ練習セシム)

毎週十二時

寫 生

同 十時

新 按

同 七時

(自己ノ意匠ヲ用テ畫樣圖按ヲ作ラシム)

圖按法

毎週 一時

(各代裝飾ノ樣式ニ基キ美術工藝圖按ヲ作ルノ要法ヲ講授ス)

美術解剖

毎週 二時

(人體及動物ノ筋肉骨格等美術ニ關スル解剖ノ概要ヲ講授ス)

考古學

同 二時

(東洋考古學中美術上ニ要用ナルモノヲ講授ス)

歴史

同 二時

美術及美術史

同 一時

體 操

同 二時

第二年

臨 摸

毎週 十時

寫 生

同 十一時

新 按

同 十二時

用器畫法

同 四時

建築裝飾術

(本邦及各國建築内外裝飾ノ大要ヲ授ク)

同 四時

考古學

同 一時

體操

同 二時

第三年

寫生

每週十四時

新按

同二十五時

用器畫法(普通圖畫教員志望ノ者ニ限リ特ニ之ヲ課ス)

同 三時

教育學(同上)

同 二時

卒業製作

第四年

二十九年七月改定後の学科課程(前掲解説1(313頁)参照)によると、改定前の実技授業での「臨摸」「写生」「新按」が改定後は「実習」という名称で纏められている。

西洋画科での「実習」の中身は前出の黒田の抱負に則って、第一年で木炭による石膏像写生、第二年で木炭による人物(裸体)写生、第三年で油画、第四年で卒業製作、というカリキュラムであり、この基本はそれ以後ほとんど変っていない。

教室での基礎的実技訓練のみならず、風景画においても「其地に臨み寫生で學はせ」「總べて繪手本を給がうといふことはしない」というように、初歩的段階から実物・実地の写生を生徒に課す習学法は、それまで我が国で行われてきた画手本臨写から入る方法と一線を劃するものであった。

黒田が明治二十七年十月に開設した画塾天真道場から西洋画科開設直後

撰科三年生として入学した白瀧幾之助は當時を回顧した文章の中で「明治初年以來の洋畫の稽古の仕方は鉛筆で手本の臨摸をしたり、又はモデルを描くにしても木炭ではほんの大體の形を下書きするのみで主にコンテを以て擦筆にてぼかし、写真の様に描いたものでデッサンの意味が少し違つて居た様であつた。今日の様に終始木炭でのみ描く方法は黒田先生御歸朝以來始まつた事である。後に此方法が一般に行はれ我國のデッサンが大いに進歩した譯である。」(『油画科創設當時』『東京美術学校校友会誌』第十九号。昭和十五年十月)と述べている。

旧來の習学法と黒田の新しい方法とでは生徒が「學んで一通り、出來ると云ふ域に進むには、何方どろが早く行きますか」という記者大橋乙羽の質問に黒田は次のように答えている。

さうですね、一年二年習つた時位までは舊派と云ふ側の方が、大變調子が宜いだらうと思ふです、同じ繪を習ふのでも手本を借りて、それに依つて書くと、始めから物になつたやうなもの出來る、併し私杯のやる方法で行けば、石膏だの裸躰に依つて書かせるものだから、一年や二年書いたつて出來たもので一面の畫の形を成したものは、チョツト少い、其形を成したものが出來ないと云ふのは、其處が新派の得意な處で、始めつから畫をこしらへる事は無用です、只物を見る目の寸法を拵へる、其内に手は獨りで慣れて來る、それで先づ目の寸法と云ふ側をしつかり固めて置いて、それから油繪をやらせる時には、人の形はスツカリ書けると云ふ工合にさせるのである」

(『洋画問答』大橋乙羽編『名流談海』所収。博文館。明治三十二年)

画手本を写して筆の使い方を覚え、木の葉はこうかくもの雲はこうかく

ものという形を知つて、天然自然に向い合つた時にも、自分が手本にして
いた画の筆法によつてそれをとらえ描く旧来の方法は「チョットした繪畫
き」になるにはよく、速成法でもあろうが、「本當に立派に仕上る道では
無論ない」と黒田は考へていた。

なお、当時使用された石膏像に関係すると思われる記事を『黒田清輝日
記』明治二十九年五月六日の條にみる事ができる。「(前略)西園寺氏ニ
行き逢つて學校の事などの話をした 内へ歸り晝めしを食てから上野へ行
き岡倉氏ニ逢つて注文の一件の話を極めそれから同氏と一緒に大學校ニ行
て、モデル用プラアートルを、一覽、歸りがけニ菊地ニ寄つて美術學校の仕事
の話をし又合田の處ニ一寸寄つた(後略)(傍点、引用者)。この日黒田は
岡倉校長と連れ立つて工科大学へ行き旧工部美術學校由来の石膏像を一覽
し、西洋画科で使用すべき標本を決め、歸りしな菊地鑄太郎にそれらの写
しを依頼したと読める。菊地は工部美術學校彫刻学科の卒業生で、のちに
石膏像製造の専門業者になつてゐる。

その結果、菊地はまず、同年十二月七日付で西洋画科用石膏標本として
「ヂスコボル立像」「ラヲコン半身像」「オソール肖像」「セ子ツク肖像」
「ラフエテル製作少女ノ肖像」「ミケランジュ製作男ノ半面」の六点を納入
する。次いで翌三十年六月九日付で各科用として「下體筋肉標本」二点、
「上體筋肉標本」一点を、更に三十一年十月二十六日付で「男子手腕標本」
四点、「男女手足標本」四点、「小兒下體前部」一点、「ミケランゼロ作半
面像」一点を納めてゐる(以上は本学芸術資料館蔵の旧台帳による)。

石膏デッサンの次の段階として第二年以降は人間(裸体)をモデルにし
た授業に入る。前掲「洋画問答」の中で、記者からどうして人間のモデル
を使うのか、という問に答へて黒田は、

「前略」學校に一番適して居るのは何と云つても矢張人間の手本ばかり
です、それだから學校らしい學校では何處でも人間の手本を使ふので
す、人間の上に就つてする説明が一番分り易い、木や猫や牛を書いて、そ
れに就て即ち硬いとか軟らかとか、又肥いて居るとか、瘦せて居るとか
云ふやうなことを言つて見ると、丸で其物の形や質の説明のやうで、か
き方の説明としては甚だ分りが遠い、さうして樹木杯と云ふものは、枝
などが少し計上に行かうが、下に行かうが、一寸知れない、それだから
ツイいゝかげんと云ふ事に爲りやすい、人間の手本ではそうは行かぬ、
首が一分なり五厘なり、牀の中心から右か左にはづれる日には大變だ、
そう云ふもので目を確かにして來れば宜い、一番人間に就て説明するの
分り易い、

と、人間をモデルにして勉強する意義を述べてゐる。

人間をモデルにした習字法は工部美術學校での画学授業がその嚆矢であ
り、それ以來数々の画塾でも取入れられてきたが、その場合も着衣人物が
主で、稀れに片肌ぬぎといつた半裸体がほとんどであった。西洋画科が設
置される前年の第四回内國勸業博覽會に黒田が出品した滯伝作「朝妝」が
裸体画というだけで風紀上の問題として物議をかますような社会風潮の下
で、裸体、それも女性のモデルを求めるとは至難のことではあつた。

黒田は画塾天真道場時代から「稽古は塑像臨寫活人臨寫に限る事」(天
真道場規定)として人体デッサンをすでに取り入れていたのだが、そこで
学んだ小林萬吾(白瀧幾之助、湯浅一郎、丹羽林平と同じく明治二十九年
西洋画科撰科三年生となる)が當時を述懐してゐる。

當時はモデルと云つても却々困難で、いろ／＼の職業の者を臨時に雇

つてゐたものだ。之れは吾々が學校に入る前の事だが、市中で八百屋とか魚屋等の重い荷車が、坂にかゝつて上るのが困難な時に、坂の下で待つてゐて其車を後から押し上げ、二・三錢貰つて暮してゐる、後押しと云ふものが居た。之が土橋の側で屯してゐたのを、出掛けて行つて雇つて来る。そして一日廿五錢位やつたが、彼等の収入は一日せいゝ十錢か十五錢なので、廿五錢やるともう翌日はやつて来ない。そこで廿五錢の所わざと廿錢位やつとして、残りの五錢を翌日來てから渡すと云ふ風にして使つた。そんな時で女のモデルなどはとても見付からなかつた。或時教室へ呼んだモデルが藝者上りで、丹羽君が「春雨」か何か低い聲で唱つたのを聞きつけて、そのモデルが口三味線で調子を合せたので、皆が騒ぎ出し其日はとう／＼畫は描けなかつた事などもあつた。

〔西洋画科新設当時回顧 並に黒田清輝先生のこと〕 『東京美術学校校友会誌』第十九号。

このような状態であるから、東京美術學校に入つても、その事情は変わるまいと案じていたところ「授業開始の當日から而も女のモデルが來て居るではないか。之には流石に官立の學校だ」と驚いたと白瀧は書いてゐる（白瀧前掲文）。

白瀧によれば、最初のモデルは上方辺からの駆け落ち者だつたそうで、このような生活苦からモデルに雇われる場合が多かつたが、当時谷中初音町に住む宮崎きくという老婆が毎週必ず男女のモデルを斡旋して、今日のモデル周旋業第一号となつたのだという。

明治二十九年当時のモデル料は「一日二圓を學校より取次人に渡し取次人は内一圓を口入業者に渡し口入業者は更に一割若くは二割を引去りて其餘を當人ニ支拂ふの常なりしが目下の相場とも云ふべきは一日小兒六錢、

六七歳二十錢、十五六歳三十錢、二十歳（女）四十錢、（男）六十錢、裸體（男）一円（女）八十錢、老人（男）五十錢（女）三十錢、老人裸體七十錢前後なりと云ふ」（『時事新報』明治三十一年十一月十三日付記事）。

ただ、裸體ないし裸體画に対する偏見に満ちた社会一般の風潮の下で、早く官立の美術學校に裸體デッサンの授業を取り入れることで相当の波紋が巻き起こつたことも事實である。新聞は「御祖師様の清輝入道は美術學校に在りて生徒に裸體畫を慫慂し遂に賞を懸けて其のモデルを募り神聖なるべき美術學校の教室には賤業婦の臭骸を露はして起臥するを見る奇觀を呈するまでに至り」（『大阪朝日新聞』明治三十一年六月五日）とか、近來日本画科の生徒が便所に立つことが多くなつたので生徒間に何か風土病でも流行つてゐるのかと校員が注意していると、あるうことか生徒たちは洋画室を覗見していた（『読売新聞』同年十月十日）などという品の悪い興味本位の記事を掲載した。

また、黒田は人体研究に欠かせない美術解剖を本物の人間の遺体を材料に実現したいとして、これを久米桂一郎に担任させてゐる。

明治二十四年以來、東京美術學校では鷗外森林太郎が美術解剖を講じていた。森の授業はこれをもとに纏められた『芸用解剖学』に窺えるように骨学・筋学を軸に構成された我が国最初の体系的講義である。だが、明治二十七年の日清戦役で森が中路兵站部軍医部長として従軍して以後しばらくは、彫刻の後藤貞行が美術解剖を担当する。

二十七年の西洋画科開設後は久米桂一郎がこれを受け持つのであるが、久米の講義を聴講した小林萬吾や白瀧幾之助によれば、講義だけでは理解しにくいからと、解剖室を急設し、医科大学から屍体を借りてきて大学の助手に実際に解剖させ、生徒に手や脚を手渡して骨や筋のようすを観察させたので、あとで屍体の臭氣が一日中鼻につき食事がまずかつたという。

さて、第三年でいよいよ油画の勉強に入るが、前掲抱負の中で黒田は「繪の具の使い方など油繪に掛る仕度とでも云ふべきことは一年二年の間に於て適宜に習はせる」と語っているが、材料や技法の面での基礎的教育がどの程度なされたかは不明である。

繪具は当面フランスから取り寄せて使わせ、ゆくゆくは日本製の繪具を研究開発したいと考へ、大学より化学士一人を招聘したといっているが、これは福岡県久留米出身の磯野徳三郎のことらしい。磯野は明治十一年東京大学化学科を卒業し、東京美術学校開校時に一時理化学の講義を囑託されていたことがある（明治二十二年一月—同二十三年三月）。二十九年二月再び応用化学の授業を囑託され、同年五月二十九日付で教授に任じられたが、黒田の期待にも拘わらず、同三十一年四月三十日に「自己ノ便宜」という理由で辞任している。

さらに黒田は、第三年で歴史画の課題を毎週一回くらい与え、画面での人物の配置、光線の取り方、色の配合等を習得させようと考えていた。以上が西洋画科での「実習」の概要である。これら西洋画科での実習授業は、いづれ他科での授業に少なからぬ影響を与えていくことになる。

西洋画導入に伴って生じた変化の幾つかを拾えば、まず入学試験で従来の読書・作文・数学・歴史・理科・実技のほかに新たに外国語（英・仏・独の内その一つを選択）が加えられたことである。また、「歴史」の範囲が「日本及支那歴史大要」から「日本歴史及外国歴史大要」に改められた。外国語は予備の課程での学科目としても毎週二時間生徒に課せられ、陸軍教授の中沢澄男が英語の、合田清が仏語の囑託教員として採用されこれを担当することになった。

西洋画科開設時の陣容は次のようなものである。

囑託教員	黒田清輝
助教授	藤島武二
助教授	和田英作
助教授	岡田三郎助
囑託教員	久米桂一郎

『東京美術学校一覽』自明治二十九年
至明治三十年には黒田・藤島・和田・岡田の四人が西洋画科職員の欄に、久米は考古学・美術解剖の囑託教員として外国語の中沢澄男・合田清と肩を並べ記載されている。

藤島武二は慶応三年（一八六七年）九月、黒田と同じ鹿児島市に生まれ、明治十七年洋画習学を志し上京したが、周囲の人々の勧めで最初川端玉章に就き日本画を習う。のち曾山幸彦、中丸精十郎、松岡寿、山本芳翠らに相次いで師事、一時三重県尋常中学校助教諭として赴任中、黒田に寄び戻され、二十九年八月二十一日付で西洋画科助教授に任じられた。その経緯の一端を窺うことのできる岡倉校長の黒田宛書簡が残されている。

拝啓此頃御様子如何候や。藤島氏儀へ中学校よりは不承諾の由申来り候ニ付重ネて三重県知事へ照会候処今朝回答参り候。來八月よりハ転任差支なき旨ニ御座候間右様取計可申候。右御承知被下度

又海外留學生候補者ニ就テハ大兄より西園寺候へ御申出相成候趣。当人ニ木下専門学務局長面会致度由ニ候間近日の内本人ヲ同氏邸（小石川表町）へ御差出相成度。右ハ和田氏ニ可有之歟。様子御示し被下度候

七月廿六日

覚 三

黒田兄 侍史

〔岡倉天心全集〕第六卷八八頁所収〕

これは黒田が七月二日「三重の藤島へ學校の助手ニならぬかと云事を云

てやった」ところ、七月五日「藤島から承知の返事が来た」（『黒田清輝日記』）ので、藤島の身柄についての交渉を岡倉に依頼したその結果の報知であろう。最初中学校側が難色を示したので直接三重県知事に掛合い承諾を得たということのようである。

なお、この書簡の後段は、和田英作らの海外留学をめぐる興味深い事実を伝えてくれる。文面では、海外留学生候補者について黒田は校長の岡倉を差し置き、直接西園寺文相に話を持ちかけていたらしいこと、その結果、文部省の木下広次専門学務局長（明治二十六年六月―同三十年八月在任）が候補者当人に会うというので近日中に木下邸を訪ねさせるようにとの内容だが、候補者として和田の名前が挙がっていたことがわかる。

その後七月二十九日に、黒田自身が岡倉に会ってから小石川表町の木下邸を訪ねている。

和田英作は明治七年十二月、鹿児島県垂水に生まれ、同二十年明治学院に入学、ここで上杉熊松（工部美術学校出身者）に洋画の手ほどきを受ける。同二十四年四月から上杉の勧めで大野（曾山）幸彦に就くが、大野歿後の二十五年一月以降、原田直次郎の鍾美術館へ入り洋画修業。同二十七年九月から天真道場へ通い、黒田・久米の指導を受け、黒田の推薦で同二十九年九月五日付で東京美術学校西洋画科助教に就任したのである。

黒田の『日記』には、九月一日「十一時過ニ木下氏が来て岡田と和田の畫を見て行た」とあるので、木下専門学務局長が留学生候補者の岡田三郎助と和田英作の作品を見にきたのであろう。そして黒田は九月七日「岡田と和田が來奴等ニ洋行の事などの決議を話した」と書いていることから、恐らくこの時岡田の留学決定を伝えたとはいえない。

和田が「岡田三郎助君と私とは助教とは云うものゝ當時の木下専門学務局長から近いうちに文部省留學生として、フランスへ留學させると云ふ

諒解のもとに助教は腰かけとしてですから〔中略〕助教の仕事はせず、月給を貰つて生徒と一緒に好きな繪を描いてゐた」（『画壇四十年 足跡を顧みて』『東京毎夕新聞』昭和九年九月―十二月連載）と回想しているように二人には初めから留学が約束されていたようである。したがって生徒たちの世話をする実際の助教は藤島武二であった。黒田は「毎年二人宛として少くも三年間は彼地に留學させる心算」であったが、何らかの理由で一名となり、まず岡田三郎助が留學生第一号になったのである。

和田は留学が当面延期になってみれば、若年の自分が助教では心苦しく、もう一度學生に戻って、勉強し直したいと岡倉校長に申し出た結果、明治三十年二月一日付で依願免官となり、次いで二月九日付で西洋画科撰科の四年級への入学が許可された。そして同年七月ただ一人だけの西洋画科第一回卒業生となる。更に同年十月二十三日、改めて西洋画科教場助手（ただし無給）を命じられ、留学の機会を待つことになった。ところが、同年八月、木下学務局長が退任したため、和田の仏国留学が実現したのは三十二年十月、和田が私費留学でドイツ滞在中のことである。

西洋画研究名目の文部省派遣第一回留學生となった岡田三郎助は明治二十一年一月、佐賀県佐賀町に生まれた。明治二十年九月大野（曾山）幸彦の画塾に入り初めて西洋画を学び、大野急逝後は大幸館の堀江正章に就き引きつぎ西洋画を修学。同二十七年一月頃、同郷の久米桂一郎を通じ黒田を知り、翌二十八年天真道場へ入門、二十九年九月九日付で東京美術学校助教に就任する。

前掲の和田の回想によれば、岡田は留學内定のあと、「美術留學生として歐洲へ行くには日本の古美術を一度見て置くがよい」との岡倉校長の勧めで十一月、古美術見學と写生を兼ね奈良へ出かけたが、旅先でチフスに

罹り、翌三十年三月まで療養に費やす羽目になったという。岡田が「西洋画研究ノ為満四ヶ年間仏国留学」を正式に命じられたのは同年五月三日、そして留学へ出発したのは五月二十九日であった。

以上見たように、西洋画科開設当初の教員は鹿児島と佐賀の二県出身の人々であり、また彼らはすべて白馬会の有力メンバーでもあった。その上に生徒も小林萬吾・白瀧幾之助・湯浅一郎・丹羽林平（以上撰科第三年に編入）、大内鉄也・丹羽礼介（同第二年）、山本森之助・広瀬勝平・城勉一郎・田中寅三（同第一年）など天真道場出身者が大勢を占めていた。西洋画科最初の学生は次の人々である。

西洋画科撰科第一年		西洋画科撰科第二年	
平子 尚 三重	椎塚 脩房 東京	大内 鉄也 東京	丹羽 礼介 兵庫
窪田 喜作 岐阜	原田 竹二郎 山口	宮路 一郎 静岡	
柴崎 恒信 愛媛	平田 宗文 鹿児島	西洋画科撰科第三年	
根津 文吉 東京	山本 森之助 長崎	白瀧 幾之助 兵庫	湯浅 一郎 群馬
広瀬 勝平 兵庫	江間 良吉 静岡	小林 萬吾 東京	丹羽 林平 東京
城 勉 一郎 岩手	磯野 吉雄 群馬		
田中 寅三 滋賀			

本科一年生のうち、柴崎・平田・原田・窪田らは七月に予備の課程を終えたあと直ちに西洋画科に入った生徒である。また平子は日本画二年から、椎塚は詩絵科一年からそれぞれ西洋画科に転入した。

内外の輿望を担い新設された西洋画科ではあったが、これを歓迎しない学内関係者があったことも事実である。小林萬吾も云うように「西洋畫科が出来た最初は全く繼子扱ひで、他科の者から異端者みたいに視られたものだ。」（小林萬吾「西洋画科新設当時回顧」）。そのような雰囲気の中で、十月中旬の房州への修学旅行が行われたが、西洋画科の丹羽林平が千倉の宿で頭から水をあびせられ、また、城勉一郎が夜中に他科の生徒から呼び出されて理由もなく殴られるなど険悪な空気になったので小林は丹羽と城を連れ途中から帰京してしまふ始末であった。この時は一部始終を聞いた黒田が岡倉校長へ報告したため、退校者一名、三カ月の停学者数名を出し落着している。

なお、岡田三郎助が留学の途にのぼる直前の五月二十一日付で中村勝治郎が黒田の推薦を受け、東京美術学校履を命じられる。

中村は慶応二年（一八六六年）十一月、奈良県に生まれ、明治二十二年頃から山内貞郎（愚僊）に就き鉛筆画・水彩画・油画を習っている。同二十八年、京都で開かれた第四回内国勸業博覧会に油画を出品して以後、黒田との交遊を深め、その影響を受けるようになった。中村の東京美術学校への就職は、岡田の留学によって手薄になった西洋画科教師陣の補充を計つてのものであろう（参照、吉田千鶴子「黒田清輝の偉名にかくれた、もう一人の画家 中村勝治郎」『繪』第二二七―二二二一号。昭和五十七年三月―七月。日動画廊）。

明治三十一年三月二十八日、校長岡倉寛三が文部省に辞表を提出、これ

に対する文部当局の処置を遺憾として橋本雅邦以下三十余名の教官たちが連袂して辞意を表明する、いわゆる美校騒動が起こった。美術学校を取り巻く学外の情況の変化はもちろんだが、西洋画科設置によって生じた学内での不協和音が遠因になったともいわれる。

この時、黒田は辞意を表明した教授たちから行動を共にするように迫られたが、「辭職は勿論予の同意する所なれども未だ文相の意見を確かめざるに之を行ふは大早計なり、今にして之を行ふは岡倉校長に對する交誼に於て元より當に然るべきも教員其者の職責に於て果して欠くる所なき乎、三百の生徒が看すく其業を失するの悲境に陥るも猶辭職して一校長に對するの情誼を盡さんとするか」(『読売新聞』明治三十一年三月三十一日付記事)と連袂を断わり、あるいは「文部大臣から直接担任されてゐるから」といつて、動乱の渦中に投ぜず、逗子に滞在して静かに製作に励んだという(久米桂一郎「黒田清輝小伝」『黒田清輝作品収蔵目録』美術研究所。昭和二年)。

この騒動で岡倉が去ったあと、黒田がその後任として校長の椅子に坐るのではとの風説が取り沙汰されたが、実際は女子高等師範学校校長の高嶺秀夫が一時これを兼務(明治三十一年三月二十九日から同年十二月二十二日まで)し、そのあと久保田鼎が校長に就任(同年十二月二十二日—同三十四年八月九日)している。それ以後の東京美術学校において開校以来中心であった日本画科に替り黒田・久米の西洋画科の発言力が増大したことはいうまでもない。

同年四月二十八日付で黒田は教授に任ぜられ、五月三十一日には中村勝治郎が西洋画科教場助手を囑託される。

同年七月十一日、西洋画の浅井忠と塑造の長沼守敬が明治美術会を代表するかたちで教授に就任する。

我が国最初の洋風美術家の団体である明治美術会は、東京美術学校開校以来、洋風美術科の設置を再三にわたり要求してきたことは前に述べたとおりである。そして明治二十九年に長年の夢が実現するのであるが、明治美術会を脱退して黒田らが組織した白馬会のメンバーがこのポストを占有したかたちになっていたわけで、岡倉退陣を機に自会からも人材を送り込むべく運動したとしても不思議ではない。この時期、西園寺が病を得て文部大臣を辞し(明治三十一年四月三十日)、明治美術会の有力会員でもある外山正一がその後任になった(同年六月三十日まで在任)ことも与つて力があつたに違いない。

これを機に西洋画科に木炭画教室が設けられ、予備科甲種の西洋画科志望者および西洋画科一年生をここで学ばせることになり、初め久米がこれを担当する。

また、油絵教室が一つ新設され、第一教室を黒田が、第二教室を浅井が受け持つことになった。浅井は自分の教室の助教に小坂力松(象堂)を迎えた。小坂は写生主義的な日本画を描き注目された人だが、浅井の許で油絵も学んでいた。第二教室には旧明治美術学校や根岸の同友会研究所で浅井に師事していた大倉正愛・荻生田文太郎・庄野宗之助・倉田重吉・石田益敏・石田常福・渡辺審也・藤村知子多が入学した。また浅井の門から木炭画教室に入ったものに加藤二郎・種子島賢助らがいる。

だが、浅井の第二教室はここで学んだ倉田重吉(白羊)が「学校の一番奥の物置小屋に落ちついた。これが第二洋画教室と云ふのだから凄まじい。先生もどうして此の物置で承知されたのか今に見当がつかぬ事だ」(倉田白羊「雜草園」一一四頁)とのちに述懐するていものだったようだ。この第二教室は助教の小坂が三十二年六月に急死、また同年十月に浅井自身がフランス留学(翌三十三年二月出発)を命じられたため僅か

一年ほどで閉鎖される。浅井は留学から帰ってのちも東京へ戻ることなく、新設の京都高等工芸学校の教授として京都へ赴任する。

それより以後、東京美術学校西洋画科は黒田清輝の技術と旺盛な統制力、久米桂一郎の理論力のコンビによって、他科を凌ぐ勢力となっていく。

4 科外講義・近世美術展覧会

この二つの催しに合わせて第三回生徒成績物展覧会も開催され、全体として左記のような展示が行われた。

第一室、「風俗室、自元禄時代至文化時代」

第二室、「美術工芸品、自元禄至文化」

第三室、「絵画、元禄時代」

第四室、生徒成績物

第五室、「絵画、文化時代」

近世美術、風俗の出品物は帝国博物館より借用の七十四点を主に、一般の所蔵者から借用した。清水清風・関根正直・高村東雲・高嶺秀夫・伊達宗徳等々出品者の名がみえる。

生徒成績物としては明治二十八年七月卒業生の卒業制作品（菱田春草筆「寡婦と孤児」、天草神来筆「悉達多太子」他）と在校生の平常成績が出陳された。

展覧会開会に先き立って各方面に案内状と入場券を配布した。宛先は各大臣・次官、各高等官、各官立学校・図書館・博物館長、学士院会長、各国公使、官立諸学校、諸官省、各新聞社、各美術団体（日本美術協会・東京彫工会・明治美術会・日本漆工会・日本絵画会・美術育英会）等で、こ

の外に左記の個人宛てにも送っている。

高嶺秀夫、松尾儀助、河瀬秀治、島田重礼、杉浦重剛、高田早苗、柴四郎、島田三郎、神鞭知常、矢野文雄、久保田讓、谷干城、辻新次、栗本鋤雲、尾崎行雄、三崎亀之助、小中村義象、西周、三島毅、侯爵大久保利和、菊池大麓、村山龍平、神田孝平、志賀重昂、三宅雄二郎、坪井久馬三、井上哲二郎、三宅米吉、金子堅太郎、益田孝、大木喬任、福羽静、箕作麟祥、本誓寺福田循誘、児玉利国、森村市左衛門、井上嘉四郎、南部甕男、森春吉、春木義彰、莊司鉄造、子爵日野西光善、山田喜之助、堀越秀、小川一真、饗庭與三郎、河上謹一、平山成信、伯爵板垣退助、子爵曾我祐準、侯爵黒田長成、同蜂須賀茂詔、片岡健吉、富田鉄之助、小松三省、豊川良平、ベルツ、コンドル、ハウス、森田文蔵、山本直徳、高橋太華、陸実、宮崎璋三、鈴木利平、幸田露伴、岡部長職、松岡寿、長尾頼太郎、三井八郎二郎、久米桂一郎、黒田清輝、小山正太郎、浅井忠、原田直次郎、徳富猪一郎、森槐南、今村長賀、柏木貨一郎、山浦（一）馬、竹添進一郎、坪内雄蔵、子爵秋元興朝、佐久間貞一、堤内匠頭、片山東熊、瀧和亭、野上出谷、久保田米僊、国分青崖、男爵川田小一郎、岩崎弥之助、同久弥、林忠正（久米桂一郎以下久保田米僊までは岡倉校長自ら配布名簿に書き加えた人々）。

展覧会は各紙にとり上げられたが、そのうちの『毎日新聞』は四月十二、十四、十五日の三日間、挿絵入りの連載記事を載せ、十六日には彫刻科の、十七日には絵画科の出陳について紹介している。

科外講義は次の日程で実施された。

四月四日 前田香雪 「松平不昧公の茶道と松平栄翁公の考古学」

五日、饗庭篁村 「元禄より文化に至る俗文学」 福地復一 「徳川中世の美術」

六日、本多種竹 「元禄より文化に至る詩道の変遷」 長尾雨山

「元禄より文化に至る儒学の変遷」

七日、竹内久一 「元禄より文化に至る彫刻に就て」 小杉楯邸

「元禄時代美術と歴史の関係」

右の講義筆記は『錦巷雜綴』第九卷（明治三十一年二月）に掲載されている。岡倉校長の計画では元禄から文化年間にかけての文学については坪内逍遙、饗庭篁村、幸田露伴に、詩文については本多種竹に、大勢については三上参次に、風俗については関根正直に、歴史については小杉楯邸に、室内好みについては前田香雪に、儒学の変遷については長尾雨山に依頼することにしてしたが、種々の事情でこのような結果となった。

5 承和楽置物

左記の記事により製作担当者は向井勝幸であったことがわかる。

○舞楽圖の置物 美術の進歩へ近來著しく殊に青年美術家の名工を續出するへ最も喜ぶべき事なり先年横濱貿易組合に大紛議ありたる節當時の日本銀行總裁川田小一郎氏の仲裁に依つて首尾能く落着せし勞に酬ひん爲め該貿易商一同より美術品を川田總裁へ贈呈せんとて昨年五月中東京美術學校へ其製造方法を注文し同校長へ海野勝珉氏の高弟にて技術上最も技群の聞へある同校助教向井勝幸氏に命じたるが注文の美術品ハ「承和樂」の圖にして其彫刻の地金ハ重に銀を用ひ之れに金銀銅赤銅等の象眼を施し此程漸やく竣工せしを以て一昨十五日横濱の注文先へ引渡したるが出来最も巧妙にして近來の傑作なれば一旦川田家へ贈呈したる

上來九月開設の東京彫工會競技會へ出品する由

（明治三十年六月十七日『やまと新聞』）

6 修学旅行 九月十一日

第一回修学旅行（京都・奈良）を意味する。はじめはこのように選抜して旅行させた。

関連事項

① 彫金科の意見書

左記の意見書は本年九月の規則改正を目安として彫金科教官たちが作成したものと思われる。彼らの工芸教育に対する考え方の一端を示す好資料といえよう。本学彫金研究室保管。

彫金教授法改良趣旨

彫金秘訣

参考品

彫金ニ付美術工藝ト工藝トヲ明瞭ナラシムル事

工藝科ノ名称ヲ削除スル事

彫金教授法改良趣旨

豫備科生徒ニシテ彫金志望者ニ限り豫備科目ノ木彫ヲ以テ換フルニ彫金ヲ以シ彫金一年ノ手本ヲ教授ス
第一年及第二年ノ課程ニ於テ從來ノ二年及三年ノ手本ヲ以テ教授ス